

車道が整っていないかった頃、前住職は積雪三メートル以上にもなる二月の一月間をかけて、本坊から各集落を歩いて回り、この地区まで来られたといえます。

『のの様』だけは玄関からではなく、雁木（雪よけのために設けられた屋根）がある縁側からお入りいただきます。幼い頃から不思議なこととは思いませんでした。

この辺りで阿弥陀様は「のの様」と呼ばれ親しまれています。豪雪

の中、本坊からはるばるお越しになつた「のの様」は大切に迎え入れられます。雪壁はだかる中を雪かきし、野外と屋内からお互いの手を伸ばしあつて御絵像を受け渡し、お内仏の隣に設けたお壇に安置します。勤行が終わると次の家からまた次の家へ。「一軒に集つて教えを聞く『お講』の当番。お寺さんの宿泊場所を用意する当番。お斎を支度する当番。各家が持ち回りで担当し、お寺さんを歓待しました。」おばあちゃんは、朝から自前の豆腐を拵えたり、ご馳走の支度に大はりきりで。一冬中使うための薪を囲炉裏でどんどん焚いて、とても暖かかったですね。みんなの気持ちもとても温かかったですよね」と妻の好子さん。しんしんと雪の降り積もる中で一昼夜、教えが熱く聞き開かれていたことでしょう。

現在「のの様」が巡るのは十軒となりました。「男衆が出稼ぎに出

ていた時代から夫婦が共働きする時代へと変わりました。各々で都合を調整しながら続けていけないう。過疎化や高齢化も切実で不安もあります。無理強いしてまでこの地で暮らせとは言えません。これはどの地域でも同じでしょう。代々受け継がれてきた集落のお講を知る人がいなくなるのは、はなはだ寂しく感じます。

「まだ小さな孫が東京から夏に遊びに来ますとね、『のの様』にお参りするんですよ。そういうものだと思っているようで、ごく自然に『のの様』の前で手を合わせているんですね。いつの間にか姿を見ていて、それが繋がっていくんでしょうね。」

自然の厳しさを受けとめながらひた向きに生活を営み、便利になったが故にもたらされる生きづらさもまた引き受けて、「のの様」のおられる毎日を丁寧に積み重ねておられます。

（高田教区通信員 虎石薫）



## スーパー豪雪地帯 集落の報恩講

高田教区第12組専徳寺世話人

内山 文英さん（62歳）



2階まで積る雪。毎年雪かきをして「のの様」をお